

かなづちドン

田中 陽



 出版人コム電子文庫

かなづちドーン

田中

陽

目次

かなづちドン 五

きまぐれな猫 十九

真夜中のニワトリ 二十九

かなづちドン

スポン、スポン、スポン。トウリヨウにぎられたオイラの鉄の頭に打ち付けられて、クギツ子たちが、屋根をつくるための真新しい白い板にすいこまれていく。

パシッ、パシッ、トウリヨウのあせが、どンドン、できていく屋根の上に飛び散る。

「かなづちドン、そろそろ一服するか」

トウリヨウが、オイラに話しかけてきた。オイラは、無言でうなづいた。オイラたちは、家を建てる大工の中で一番えらいこの人をトウリヨウとよんでいる。

そして、トウリヨウもまた、オイラたち道具ひとつひとつに名前をつけている。カナツチのオイラは、かなづちドン。ノコギリは、のこぎりドン。クギは、クギツ子。カナナは、カンナちゃん。トウリヨウは、みんなの名前をよびながら、オイラたちを使い、オイラたちの手入れをする。

プカプカプカ。トウリヨウのくわえたタバコから、けむりが青い空にゆっくりのぼっていく。今日は、めずらしく、海からの風がない。

前は、海に向かって開け、その他は、山に囲まれた小高いおかの上に、大きな家が建っている。この屋根の上は、気持ちがいい。

目の前に黄色い花をさかせた菜の花や、小さな黄緑色の芽を出したばかりのだんだん畑が続く。畑の横のカキの木やクリの木のその向こうに家の屋根が連なっている。

そして、遠くには、キラキラと波をかがやかせながら、船をうかべている海が見える。

オイラは、のこぎりドンといっしょに、うとうととはじめた。

「カッター。カッター」

ボト。ボト。ボトーン。空から、なにやら落ちてきた。

「くさい」

オイラは、思わず鼻をとじた。

「カラスが、フンを落としたんだ」

のこぎりドンが、起きながらさげんだ。

「このやる」

オイラも空に向かってさげんだ。

「カッター。カッター」

ボト。ボト。ボトーン。また、カラスがフンを落としました。

のこぎりドンが、体をゆみのように反らせて、クギツ子たちをカラスめがけて、ほおり投げる。

オイラも、バットでボールを打つように、クギツ子をピュンピュン、飛ばした。

パラパラパラッ。トントンパラッ。

屋根の上には、カラスに当たらず、落ちてきたクギツ子たちが、どンドン散らばっていく。

「コラッ」

先ほどから、様子を見ていたトウリヨウがどなった。

「カッター。カッター」

カラスは、なにともなかったように、海の方に飛んでいった。

「かなづちドンも、のこぎりドンもさつさとクギツ子を片付けろ！」

オイラたちは、無口のまま、クギツ子を集め始めた。

「面白くない」

オイラは、心の中でそう思って、のこぎりドンと目を合わせた。

しばらくして、だまって見ていたトウリヨウが話しかけてきた。

「かなづちドン、おまえにとつちや初めての家だな。この家は、でかいぞ。おれが今まで、建てた中じゃ、最高の家になるはずだ」

トウリヨウは、やさしくほほえんでいる。その笑顔に、オイラの心のモヤモヤは、風に流されるように消えていく。

「トウリヨウ、いつごろできるんですか？」

「秋だな。じっくりやるからな。おまえにもがんばってもらおうぞ」

そう言うと、トウリヨウは海を見ながら、大きくけむりをはき出した。オイラは、鉄の頭をかたくして、気合を入れた。

そのとき、だんだん畑の坂道を、白い車が一台ゆっくりと登ってきた。太陽の光が、車からはね返ってきてまぶしい。坂道を登りきると家の前で止まった。中から、トウリヨウよりわかい男の人が出てきて、屋根に向かって、大きな声を出した。

「くくるうさまです」

「やあ、こんにちは」

と言いながら、トウリヨウは、オイラを残し、はしごを急いでおりて行った。

車の後ろの席の窓ガラスが開いた。長いかみに、ピンクの麦わらぼうしをかぶった、小さな女の子がいる。

その子は、屋根の方を見上げ、オイラを見つけると、ニッコリとほほえんだ。ひとみの中に青空がうつつっているように、きらきらとかがやいていた。

その後も毎日、毎日、クギツ子を打ち続けた。オイラの頭とクギツ子の頭から、火花が飛び散ることが、たびたびあった。

とつてもいたかつたけど、ピンクの麦わらぼうしと、女の子の笑顔を思い出すと、勇気がわいてきた。

道路の横に植えられたあじさいが青やピンクやむらさきの花をさかせたと、雨の日が多くなってきた。仕事も休みがちであった。

「雨は、いやだなあ」
のこぎりドンがくもり空を見上げながら、うらめしそうにつぶやいた。

「本当にいやだね」
オイラも空を見上げた。

「雨が多いと木がしめっちゃって、切るのが重いんだ」
のこぎりドンは、ため息をついた。

「おい、かなづちドン。雨もりしてる所があるから、屋根に登るぞ」
トウリヨウは、オイラをにぎりしめると、はしごを登りはじめた。

屋根の板のはりかえをしていると、雨がだんだん強くなってきた。空を見上げると黒

い雲が、海から山へどんどん流れていく。

通りのあじさいの葉っぱの上を、ゆつくりと歩く、かたつむりの親子が見える。風が強くなり始めた。渡り鳥のむれが横風に流されて、思うように前に進めないでいた。「あっ！」

オイラは、空中に飛ばされた。トウリヨウの手がすべったのだ。はずみでバランスを失ったトウリヨウが、屋根をすべり落ちていく。オイラの体もどんどん屋根から遠ざかる。

ドスン。

「いたっ！ たたたー」

トウリヨウの大声が聞こえた。

ガツーン。火花が散り、オイラは、岩にたたきつけられた。

「いてっててえー」

オイラは、思わずさげんだ。

「だいじょうぶかー。かなづちドン。おーい。どこにいるー」
のこぎりドンの声だ。

「こつちだー。いたいよー」

「かなづちドン、だいじょうぶか？」

「いたいよ。頭のはしっこが欠けちゃたよ」

頭がスキスキした。トウリヨウもおさえながら、さがしに来てくれた。